No. 85

1959年2月1日

主な記事

酪農の問題点……1
辞任あいさつ……4
会員の近況……5
さろん……7

千曲會報

昭和34年2月1日発行
長野県上田市常入
信州大学繊維学部内
編集兼発行人　小山長雄
信州大学繊維学部内
発行所　社団法人 千曲会

昭和31年6月18日第3種郵便物認可　毎月1日発行　定価1部15円　振替口座 長野 6243 東京 43341

これからの酪農の問題点

日本学術会議会員
名古屋大学教授　齊藤道雄

日本学術会議第6部会の際は当学で大層お世話になりました。

これからの酪農の問題については次の3項目を順序に述べます。

1　農業の近代化と酪農の導入

2　新しい形の酪農の進め方

3　養蚕業と酪農の関係

農業の近代化の問題をとりあげたのは次の理由からである。すなわち，これからの農業は労働時間の意識を明瞭にし，過剰な労働でなくて，悠々と生産をあげていく農業にしなければならない。すなわち，企業としても魅力のある産業にしなくてはならない。

それに資本も必要であるが，急にその資本をかけることは望むことはできない。だんだんに収入を多くし，そのうちから，再生産に必要な道具を買っていくのが立前である。

私のいう近代化とは大きな機械をつかつて，諸外国で行っているような機械化農業をやれというのではない。従来の農業生産方式のうちで，特に労働投下量を問題にし，1時間当りの労働の生産性を高めるよう努力することである。

そして，多少の機械は入れなければならないが，主として有利な家畜をいれ，収入を増加することである。それによつて，投下労働に対する収入（生産性）を増加することである。

従来の日本の農業では家畜による収入が入つていなかつたので，1戸平均25～30万円の収入しかなかつた。しかも労働が過重であつた。家族の労働を合わせて1年6000時間以上もかけていた。その上に畜産を奨励したので，更に労働は増加した。したがつて畜産が大きく日本の農業にはいつていけなかつたのである。畜産収入はせいぜい3万円（耕種収入の20分の1程度）程度であつた。これが今までの有畜農業の姿であつた。

従来の過剰な労働時間で耕種農業をやつていればその上に「有畜」を入れるとそれだけの「超過勤務」となる。このようにして従来の形の有畜農業も一応ここで時間計算をされることが必要になつた。日本では昔のままの米麦農業をやつていると1年間の労働時は6000時間を必要としていることがあつた。そして収入といえば，わずか30万円の収入しかない。これを時間割の収入にすれば，1時間50円たらずの割となる。これに反して世界の畜産を主とする農業はどうか。例えばニュージランドでは1年間に農家は約2000時間でやつており，その収入は1年間に200万円という莫大な収入となる。

これは1時間の労働に対し実に1000円の割合になる。

外国でも農繁期はある。例えば綿羊の毛刈りの仕事はこれに当る。一期に刈らねばならない。この時は1日5000円も払つてアルバイト労金をかけても結構ひき合つてくる。

アルバイトに学生を利用する。アルバイト代が1日5000円である。これからわかる様に日本農業は，これにかけた労働時間に対し生産性が甚しく少い。労働報酬という観念に欠けている。

この様な状態のままで酪農を進めてもよいものかどうか深い疑問が残されている。特に新しい畜産を入れる前にこんな農業でよいかどうか考えさせられる。しかしながら，最近では愛知県等の進んだ県ではこの問題についての研究が若い農民のうちから現われてきている。

すなわち，畜産をいれて，収入をますには，まず米作り労働の吟味から始めねばならない。日本では1石の米を作るのに100時間を要している。ニュージランドでは僅か2時間の労働で同じ米を作る。

したがつて，この時間当りの生産性の隔りは大きい。これは耕種方法に家畜・機械等を使用して人間の力を省き，馬力を増大して少しでも時間のむだをなくすようにすべきである。労働の生産性が高まり，余りの時間がでれば，そこで農業の仕組を変えながら従来の農業に新しい「畜産」をとり入れていくべきである。

すなわち，労働的にみて，無理のない形，すなわち，8時間労働（或は週45時間又は年2300時間前後）でやれる農業に近い将来変えて行かねばならない。

それでも日本ではいまだ家族労働を使つていけるから（将来はこれも問題になるが）2人の労働を合して5000時間以内にもつていくようにする。

それができるようになつたら，収入の少い耕種農業（米は別）の時間の一部を漸次収入の多い畜産の方へ労働をむけて行かねばならない。かくして，畜産の方に用いる労働の大小によつて，日本の農業は次のように変つていく。ただし化学反応のように逆反応もでてくるのである。ゆき過ぎればもどる恐れもある。

A　耕種農業（米麦農業又は主穀農業）

↓↑

B 有畜農業

↓↑

C 耕種畜産複式農業

↓↑

D 畜産農業（畜産の収入の方が耕種の収入より多い農業）

↓↑

E 主畜農業（外国のように畜産を主体とした農業）

日本では土地の広さの関係もあり，Eの型になることは少いであろう。しかしDやCの型は可能であり，最近は各県に数千例はでて来ている。

たとえば，乳牛を3～5頭飼い，水田を1町歩経営している農家はC型である。この型で，米で40万円，乳牛で50万円，合計して90万円位粗収入をえている農家もでているという。またD型では畑作農家が多い。イモを作りながら乳牛を6～8頭飼つている農家や，耕地を殆んどもたないで，河川敷の草地のみを利用して乳牛を飼つている農家はこれである。これらの点を考えると今までのように耕地1町歩ありながら乳牛1頭しかもたないような経営は昔の有畜農業である。この場合は耕種農業の方に，新しい近代化（労働生産の向上）が行われないで労力不足が原因した場合や積極的に，飼料対策が自己の農場に行われない場合に多い。このような形ではせつかく畜産をやりながら収入の少い農業になるのである。

新しい形の酪農の進め方には次のような方向と条件が必要になる。

(1) 経営の拡大

（3～5頭の搾乳牛飼育の体勢へ前進）

今までの酪農の進め方は消極的で遠慮がちであつた。すなわち，5反以下の農家にはニワトリ，豚，緬羊のような家畜をすすめた。そして乳牛のような大動物は5反以上の農家にすすめられて来た。

しかも乳牛を1頭か2頭である。5反以上1町歩まで1頭，1町以上なら2頭という程度であつた。

これは一つは米作労働の過重であつた点が主な理由である。次は飼料の自給技術が低かつたからである。

これは後で述べる水田裏作に対する麦作（実取り）の必要も関係した。

食糧増産政策の強行もその理由である。今では，実取りの麦は収入から見ても農家は有利でないことを知つて来た。

そこで裏作の麦は青刈に切りかえて来た。そのため5反農家でも乳牛を3頭位は飼えるようになつたのである。したがつて酪農の行き方としては今迄の導入の形は全く古いものとなつた。たとえば，5段以下の零細農家が1頭の乳牛を飼うことさえ容易でなかつたが河川敷を利用すれば可能となる。最近では草地農業の発展で変つて来ている。

したがつて1町歩位の農家ならば5頭位の乳牛を飼うことが出来るのである。現今では未だ1～2頭が普通であるが。

1町歩農家で5頭の乳牛を飼うのに8時間労働で大体1人分の労働を割りあてられれば今日では出来る。規模の適正化という考え方が変つて来た。昔は1頭飼うのに1日4時間かかり，1年間では1500時間要することになつていた。

ところが，5頭の場合には1日2時間以内で済む。

米国では，1頭飼うのに1日僅か5分～10分の割である。

そこで私は新しい形の酪農の進め方という点で労働の問題を再び取り上げねばならなくなつた。日本でも乳牛を5頭飼うのにうまくやれば1日8時間以内で済むようになつて来た。すなわち1人の農民（1日8時間労働）で済むのである。

もし1人（年3000時間）で5頭飼い，年粗収入50万円あれば，労働生産性は高いものである。

更に，次にのべる酪農の集団化，共同化が進むと，もつと少時間で酪農収益が上つてくる。但し各農家が1戸5頭飼うのには資金がいる。技術の準備がいる故にだんだんにこの方向に進むのが良い。

但し，これからの酪農家はこの考え方をもたねばならない。したがつて牛舎の設計，サイローの設置場所，堆肥舎の設計なども将来を考えて計画をたてなければならない。

私は将来のため5頭飼育を考えに入れた牛舎の設計を福島県の矢吹にある日本酪農講習所の雑誌に出しておいたので詳しいことはこれを見ていただきたい。

(2) 集団化への努力

集団化というてもソ連のコルホーズのようなものを一挙にしてやるというのではない。似たような経営者が集まることなのである。出来れば隣同志が酪農家になることである。

酪農家が相互に離れていては共同の仕事ができない。今までのように1軒は酪農，その隣りは養鶏，その隣は養豚というような農家の集団は新しい形から見ると感心しない。

副業的畜産の時代はそれでよかつたが今はそれとちがう。

したがつてだんだん近所同志が同じ畜産にすすむようにすすめる。経営の「交換分合」である。そして少くとも5戸を1団として同じ畜産グループになるのである。

集団化の利点はいろいろあるが最も大きな特徴は高い技術に進むことである。それと同時に協同がさけばれ労働生産性が高まる。酪農家がここに5戸あるとする，これらが集団化すると一つの仕事，たとえば共同搾乳をすることができる。また，5戸の家の技術の中で最もよい方法をとり入れることになる。そこで「技術」が常に進歩する。単独でやつていると技術は進歩しない。又，協同作業が出来るようになると仕事の能力も上るという利点もある。この様なことは養蚕家にも必要なことである。養蚕を集団化すれば共同飼育ができ，労働生産性が高まるこういう地帯に集団化して畜産取り入れの工夫をすると面白い。これには立派な人格と立派な農業技術が一層必要となつてくる。

畜産の場合は集団すると，共同の草地を造成，共同搾乳，共同冷却や従来やつていた飼料の共同購入，飼料の共同配合も一層よくできる。

(3) 飼料の自給体勢の強化

乳牛の場合は草食動物であるから，9割までは自給飼料で賄えるはずである。しかるに日本の酪農は，すでに何回も述べるように濃厚飼料中心で本当の酪農にはなつていない。

丁度今は日本の農業の転換期になつている。殊に水田裏作の有利な転換が必要になつている折，また畑作振興も呼ばれている折，さらに水田の転換畑の問題も新しい研究が進んできて家畜飼料の生産方向にすべてが有利に展開している折であるから，自給体勢を徹底化するにはよい時である。

要するに乳牛1頭当り澱粉価で500貫，生草で6000貫の生産が出来れば自給化は可能である。特に飼料輪作（青刈トーモロコシ2回，カブラ，青刈麦の4毛作，

或は甘諸—青刈ウンダイ，青刈大豆の3毛作などいろいろの組合わせがある）に研究をすすめる一方水田裏作には馬鈴薯や青刈ムギ，又はイタリアンライグラス，コンモンヴエッチなどを利用して自給化をすすめるのがよい。

次表は水田転換畑を2反利用して搾乳牛3頭飼う輪作例である。

1町歩水田農家（実施3～4毛作利用転換畑2反歩）

斎藤

(A) 購入濃厚飼料

配合飼料	50貫
油粕	30
大麦	50
脱脂糖	150
澱粉粕	50
麩	30

（1年の12.7%　澱粉価194貫）

(B) 農家副産物

台所廃物	38貫
ソラマメ	68
大豆茎葉	1000
野菜屑	500
藷蔓	1200
カボチヤ	1000
藁	500
生糖	40

（1年の21.3%　澱粉価325〆）

(C) 野菜利用

乾草	500〆
野草	1600

（1年の18%　澱粉価274〆）

(D) 飼料作物

表裏2反	1反	青刈大豆	400
		甘藷	800
		甘藷蔓	900
		青刈菜種	1000
	1反	青刈トウモロコシ	2000
		青刈落果生	200
		青刈カウピ(混作)	100
		青刈大豆	1000

（1年の48%　澱粉価732〆）

計　乳牛3頭分澱粉価　1525〆　800

（乳料20石　体重120〆）

(4) 草地農業の確立

草地農業はこれからの日本のホープである。殊に山を多くもつ長野県は有望である。

日本では1戸当りの耕地面積が少ないしかるに草地は沢山残されている。これまでの畜産は草地を利用しない畜産であつた。特に日本の酪農は牛の栄養の6割は濃厚飼料に依存している，がこの状態は世界でも稀である。日本の酪農は草のよい点を知らない酪農である。草は濃厚飼料以上に栄養価がある。今後は草地造成と草の利用問題が表面化してこなければならない。日本の耕地面積は農家が600万戸に対して500万町歩あるが雑草地は500万町歩も残されている。これを立派な牧草地にすることができるのを日本人は見のがしている。ある外国人が日本の山地を旅行してこう云つている。「富士山麓や阿蘇山傾斜地には可成りの灌木の林や雑草地がある。それにもかかわらず日本の土地を狭いというのはおかしいではないか？」実際富士・阿蘇・雲仙等には非常に広範囲の雑草地がある。その他，低い山，山のスソ地，畦畔，堤防の雑草地の利用を考えねばならない。また耕地の輪作式の牧草化も面白い一例である。たとえば，れんげ草の麦間栽培，水田地帯の裏作にイタリアンライグラスとクローバーの応用，水田の一部の畑への転換，果樹園空地の草地的利用化等について長野県等は大いにやるべきである。又各地で研究会が開かれているが，なかなか熱心な農家がある。傾斜地や山地の牧草化も大切である。こういう点に今後の問題が残されているのではないか。又，草養鶏さえすすんで来た（即ち，クローバーのような草にはビタミンの外に孵化要素やホルモン等が含有され養鶏に適していることも最近研究されてきた）。したがつて，今後日本は従来の穀物中心の養鶏から草養鶏へと一部は切り替えて行ける分野がある。今後草を利用して日本の国土利用率を高めることがますます必要である。これは育種学，土壌学栄養学などの科学的技術を必要とする。草地造成という協同精神と協同技術の両者が欠くべからざるものである。

(5) 農協と資金の問題

農協は元来生産方式に対してもつと協同化すべきで，今の農協は販売のみの協同しかしていない状態である。こんな状態では農協としての本来の形をとつていないということになる。換言すれば農協は生産技術・集団化の向上に何もやつていないということである。これでは本来の農協の精神に反する。販売の方ばかりでは逆に商人に負けるばかりである。農協は商人ではないからである。

農協は農民の集りである。故に知識を集めることや技術を集めることに協力することが必要である。今の農民は農協外から知識を集めているが農民の総意と工夫，殊に新しい角度からの生産組織の改善は，農協なら出来ることである。生産性の向上は農協が真先にたつてやるべきであろう。

農協には金はある。しかるに経営改善の必要は迫つていて農民には金がない。農協自ら相談にのれないものか。

養蚕と畜産は，新しい意味で大いに結びつく問題がある。

いずれも動物生産農業である。そしていずれも日本の農業を基盤にしている。地価の高い集約度のすすんだ水田地帯で水稲と園芸とを主とする所では，養蚕は困難であろう。

そして山地の方に養蚕は進むことが適当である。養蚕と結ぶ畜産の特徴としては，蛹が最も良い餌で，ビタミンB_2を含んでいる外に蛋白質も多く，家畜の餌として最高の品である。これが蛹（又は蛹粕）のは最適である点である。養蚕は桑の栽培という大基盤の上に立つ副業の一つで農業の主要な部門を占めている。

これに対して今までの畜産はそれ程今まで土地に立脚する点を重要視されていない。

これからの酪農は初めから土地に立脚している養蚕に学ぶ点が多分にある。今までの酪農は土地に立脚せず購入飼料に立脚したのである。そこに日本の畜産は根がなかつた。

それで，今後の進め方としては養蚕から畜産の方に移るという経路をたどるのではなくして逆に畜産の方の側から養蚕の地盤の方へ移るという経路を取つた方がこれからの長野県の畜産としては面白い。

これは有意義な方法であるから今までの養蚕を決して軽視してはならない。養蚕があるから畜産が導入されるのである。ところで最近の酪農は終戦後非常に発達して来た。戦前30万であつて戦時中は一度減り戦後の今日は70万頭にまで増して来た。例として長野県には特に多く3万～3.5万位いる。平均すると日本の大きな県は各県当り2万頭位の乳牛を飼育していることになる。この事実は農家がいかに急激に日本農業を酪農化して来たか判る。乳牛をふやしすぎた感がないでもない。養蚕のように地についていない形である。近頃の酪農は養蚕のような基礎

的な基盤もなく副業として入れた畜産をそのまま増畜したことに危険性がある。酪農ははじめ副業的な有畜農業の形ですすめられて来たが日本では有畜農業という形の進め方は現在の酪農を進めるにすでに技術的にも古いものになつた。又，収入の点からも有畜農業のような弱い形の畜産ではいけなくなつたのである。

長野県の酪農が大きくすすんだ理由の一つは気候が寒冷であつて乳牛の健康によいこと，他の一つは消費地が近くに（3～5時間の輸送）あることも見逃せないことである。そして養蚕のために酪農の発達が促されたとは必ずしもいえないが，これからの酪農は養蚕の恩恵をうけて基礎ができ，新しい酪農になつてゆくだろう。

何となれば，今までの酪農は地についていない酪農であつた。誤まつたところの濃厚飼料酪農であり，かつ1～2頭飼育の少数経営であつた。労働生産性の低い酪農であつた。或る意味の古い形の酪農であり収入の少い酪農であつた。

今度は新しい酪農に進むことが大切な使命である。この場合は養蚕の地盤にはいつて行くことになるが，前にも述べたように，養蚕の方から酪農を入れて行く形がよいであろう。即ち桑園の植栽を粗にし，その間に牧草を入れてゆく。丁度果樹園の上に牧草を入れるのと同じようにする。

養蚕の方も，やはり農業と同じように新しい形をとる。

即ち，共同生産方式をとり稚蚕共同飼育などによつて労働生産を高めてゆく。かくして養蚕地帯が集団して新しい畜産技術をとり入れてゆく。それには桑の葉の利用，蚕糞蚕沙の利用なども勿論考える。桑のような良い餌は他に見つからない。蚕は良いものを見つけたものである

牛は蚕より今まで悪いものを食つていた。この牛に桑（残桑でよい）を与えると，牛の能力は大いに挙がる。

かくして養蚕地帯に於て集団化して経営の一部に畜産を入れていく。ただし養蚕そのものの労働生産性の低い処では牛はまだ早い。むしろ緬羊がよい。緬羊は毛と肉と両方を期待できる。即ち，桑園の牧草導入，桑や蛹の利用などを考えて労働生産性の向上するに従つて，だんだん蒙畜をいれていく。これは，養蚕技術者の仕事の範囲に入れていく。

私は日本の養蚕地帯は漸次山に向つて進み，残つた地帯は畜産を加味した半養蚕の形（ただし共同飼育）になつて行くのではないかと思われる。

ごあいさつ

——編集総務を辞するにあたつて——

小山 長雄

このたび私は，この会報の編集総務という役柄をやめさせていただき，バトンを白井美明先生にお渡しすることになりました。

私は，昭和28年（1953）6月，松尾卓見先生のあとをうけ46号を刊行以来，昭和33年（1958）11月発行の83号まで，足かけ6年の間この仕事を手伝わせてもらいました。たいへんよい勉強になり，このような機会を与えられましたことを，心から感謝するものでございます。ただ生来のズクナシに加えて，非才，ニブカンの私は，じゆうぶんに皆さんのご期待にそいえなかつたことを恥じ，晴がましい座に位置してジンゼン日を過しましたことは万死に値するものと存じております。

会報はたしかに会の運営や会員相互の意志疎通に重要な役割をはたしていることは，どなたもみとめているところであり，それはまた会報自体のもつ性格でもありますから，編集者のいかんにかんせず，出しさえすれば役割の大部分をはたすものであります。長い期間やつたことが少しも自慢にならないゆえんでございます。就任当時は何とかして“たのしい”ものにしたい，“待ち遠しい”ものにしたいと考え，その努力も多少はいたしたつもりですが，号を追うごとにマンネリズムに陥り，意力が霧消し，しだいに乾わいた紙面が露呈されだしました。ここらで交替すべきであつたと思います。しかし私のズルサはこのシオをとりにがし，いご会員の皆様のご寛容に甘えて今日にいたつたわけであります。

編集部は月に1回という相応の苦労が附随しますので，できれば馴れた人がやるのが時間的なロスも少なく，紙面も無理ができませんが，だからといつて長年月同じ人が作ることは新鮮味が失われ，てきとうな処置とは思われません。他の人にしいるわけではありませんが，雑誌の編集とはことなり会報にはそれほどのタレントやセンスが必要でもありませんし，部員の方達，関係者が誠心誠意やつてくれますので，もはや私が持続する理由は見出せないものであります。

ましてや白井先生のような真摯誠実な方を後任に迎えるにおいておやであります。

三種郵便物の関係上，発行名義人はしばらく私の名が用いられますが，それはそれ，じつさいの編集は白井先生のもとでおこなわれるわけであります。したがつてこんご編集上のご連絡は製糸学科白井先生あておねがいされますよう。会員の皆様にはどうぞ倍旧のご好情をおよせくださつて，紙面がセイセイ，ハツラツの気宇に包まれますようご支援くださるようおねがい申しあげます。もちろん私もまた編集のかたわらにあつて，できるだけの援助をいたすつもりであります。ひとつにはそれが私のせめてもの罪ほろぼしでもありますからさいごにこれまでの編集上の不手際やご無礼を厚くおわび申しあげ，おゆるしをこうしだいであります。

会員の近況

近畿千曲会総会

久しく会合を開かなかつた近畿千曲会もようやく実を結んで去る11月9日に大阪の繁華街宗右衛門町「いろは」で開催された。

当日は折悪しく朝から雨であり，会員の出席状況について気をもませたが，会社のレクリエーションが中止になつた等の反対現象もあり，申込者全員の外にとび入りもあつて36名が出席した。しかし近畿千曲会員260余名に対しては，やや少い出席率である。

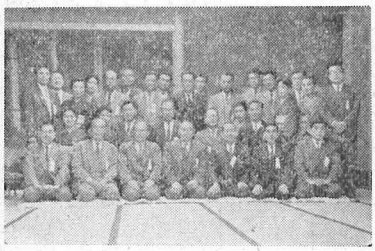
なお，本部よりは野口理事長に代つて町田理事が出席された。

会は定刻午前11時に大日本紡績の中尾氏が司会となり前会長である大日本紡の甲本氏の経過報告ののち石坂氏が議長となつて次のように議事をすすめた。

(1) 近畿千曲会支会長に石坂氏をおす

(2) 近畿千曲会の分離について会長よりその理由を説明して議長にはかつたところ，現在の近畿支会の地区を大阪，奈良，和歌山，京都，滋賀及び兵庫等の各地区に分離し，それらの会で近畿千曲会を結成する。

(3) 近畿千曲会を解散し（大阪，奈良和歌山），（京都，滋賀），（神戸，兵庫）の各ブロック別に千曲会を結成する等，会員より真剣な意見の開陳があつた。なお，町田理事よりも他の支会においても同様な例について説明があつたが，この



問題は更に，大阪・和歌山・京都・滋賀兵庫の各代表がもう少しよく検討することとして保留した。

(4) 千曲会役員は，

支会長　石坂虎治郎（糸5）

副支会長　中尾　七郎（紡5）

外に相談役，幹事を選出し，

支部幹事には，

京都支部：久保田啓二郎（紡20）浪方昌近（化5）白沢清（化8）

滋賀支部：北沢茂樹（紡16）横田健三（紡20）

和歌山支部：神崎頑夫（糸17）藤本斉（紡8）

を決定した。

(5) 母校50周年記念事業について

本部町田理事より詳細な説明があり，会員からも熱心な討議があつたのち，異議なく諒承した。

(6) その後　鐘紡研究課長で最近工博になられた尾沢敏男（糸22）より最近の合成繊維事情をきいた。

(7) そろそろ夕方近くなり道頓堀の色とりどりのネオンが輝きはじめる頃になると，一杯の酒がますます味覚をそそる，自己紹介を終つた頃には，もう皆上着を脱いで上田時代のクラス会風景の再現であつた。目もと，手もと，とろりとろりの寄せ書をして近畿千曲会の今後の活躍を祈りつつ解散した。　（小沢利男記）

千曲会愛媛支会幹事会

晩秋の11月末に松山市で50周年記念事業資金募集についての第1回幹事会を内川会長を中心にして開かれ種種話合いされたので，その様子を支会の皆様にお知らせして絶大なる御協力を得たいと思う。

記念事業の構想については千曲会報にて御存じのことと思うので略すが，千曲会半世紀の記念事業として種種研究の結果決定されて実施することになつたのである。従つて支会としても，8月の総会の話合いに基いて，各幹事の御努力を願つている。各人の募集金額が募集に当つての第1の問題点でどうきめるかは困難なことであるが，本会に於いて卒業年次によつて拠出金額の基準が一応決められているので，支会としても他によい方法が考え出せないのでその基準によつて各人の金額を別記のように書き出して見たがかなりの負担金額となる。然し不可能な額ではないと思う。この事業に対する考え方の相違，母校に対する愛情の強弱によつて募金目標が達成されたり，或は目標に達しないような結果となるものと思われる。

この事業が計画通りに出来るか否かは50年を迎えた千曲会が世にその信をとうことであり，会員としては是非完遂したいものである。卒業以来古い方で40年余にもなり母校にも遠い関係もあり，母校近辺の会員とは同条件とは思われないが初代の針塚校長の精神は多数会員の血となり肉となつているものと思われる。ただこのような会員の母校愛のみによつて此の事業が完遂せられるのである。

支会としては，この機会に目標の募金額を達成し，その間に様々な苦労を全会員が味う事によつて支会々員の団結を強めることともなり，その結果は力ある愛媛支会ができると思う。是非支会全員の御協力を得て募標額を達成したい。

当日話合つた事項

1 昭和34年2月末までに各人の実際出して頂ける金額を各地区幹事に於いて調べる。

2 その結果を，大洲市蚕業試験場内工藤見吉宛通知すること。

3 昭和34年8月末目標に資金募集を完了すること。

4 昭和34年2月末頃に第2回の幹事会開催の予定とする。

5 各人の目標金額及び担当者名（敬称略）

東予地区　担当者　竹森克己

安部　重	（昭12卒糸）	4,000円
木下　涼	（昭25〃化）	2,000
滋野　純之	（昭25〃化）	2,000
杉野　寿一	（大5〃糸）	5,000
杉野　秀見	（和26〃紡）	1,500
竹森　克己	（昭17〃化）	3,000
高村　達奥	（昭25〃化）	2,000
中平　修	（昭18〃化）	3,000
羽藤　泉	（昭11〃蚕）	4,000
三宅　恒夫	（昭29学紡）	1,000
山本　信三	（昭25卒紡）	2,000
三好　弥市	（大10〃糸）	5,000
宮崎　忠祥	（昭6〃糸）	5,000
計		39,500

中予地区　担当者　寺井子蔵

内川　勇	（大15卒蚕）	5,000
大政　安一	（大14〃蚕）	5,000
高岸　健次	（昭17〃化）	3,000
鷹本薫一郎	（昭7〃蚕）	5,000
寺井　子蔵	（昭8〃紡）	5,000
富田庄三郎	（大10〃糸）	5,000
丹生谷精六	（大10〃糸）	5,000
波多野千里	（大3〃蚕）	5,000
松崎　正夫	（昭25〃紡）	2,000
宮崎　清治	（大10〃蚕）	5,000
室賀　享	（昭29学紡）	1,000
黒岩　君雄	（昭10卒紡）	4,500
細田　博正	（昭33学紡）	1,000
計		51,500

南予A地区　担当者　河淵　益美

岩本 市郎	(大3	蚕)	5,000
河淵 益美	(昭6	蚕)	5,000
田中 実	(昭11	糸)	4,000
申村 孟夫	(昭26	糸)	1,500
牧野 春雄	(大10	糸)	5,000
計			20,500

南予B地区　担当者　薬師神弁太郎　工藤　見吉

上田 岩男	(昭2	糸)	5,000
大熊 良孝	(昭33学紡)		1,000
大久保義彦	(〃	)	1,000
梶田 広貞	(大9	蚕)	5,000
工藤 見吉	(昭5	蚕)	5,000
須沢 保夫	(昭29学紡)		1,000
大上 吉清	(昭8	糸)	4,500
高田 正気	(昭13	糸)	4,000
成尾喜八郎	(昭6	糸)	5,000
薬師神弁太郎	(昭10	糸)	4,500
計			36,000
募金目標総額			147,500

(33.12.1 工藤記)

糸15回生 旧交を温む

11月8日，東京郊外荻窪の池畔亭で，わが糸15回卒のクラスメートが30年振りで旧交を温めることとなつた。

10年目には，家族照会かたがた，近影2葉宛交換したが，20年目は終戦のドサクサで，そんな心のゆとりがなく，漸く五十路の坂を越え，びん髪とみに白きを加えるに及び，にわかに郷愁に似た感懐を覚えるに至つたのだ。

思えば，大正の末期，製糸業に有縁の友だちが，希望に胸をふくらませて校門をくぐつた時は，30人の多きを数えたのであつたが，大滝製糸部長昇格早々にてその厳粛な鍛練によつて，数人は落伍し，当時としては珍らしい少人数の卒業生として，社会に巣立つた。その後有為転変，あのガラクタ悪童達が，今はどんな姿になりおおせて，果して幾人集るのかと，興味と期待と友情とを，ほぼ同率にこね合わせた気持で，池畔亭の奥の広間へ足を早めた。居る居る。まさしくそれと識別される姿で，既に笑い興じて居る。

おい岡本，今は何をして居る。なに鉄工場でポンプを作つて居るのか，風変りだなア，時には細田に会うかい，奴は検定所長と云うから，窮屈して居るだろうなア。

宮城，よく兵庫から来たものだなア，スツカリ役人様におさまつたじやないか，時に佐藤は秋田の検定所長を辞めたと云う話を聞いたが，今は何をして居る。元気だろうなア。

角替，いつから福島に住みついたのだ。デニール糸の繰返し位でめしが喰えるか。笠原豊は福島の病院に勤めて居ると云う話だが会つたが。

笠原，お前が一番金持らしいから会費を少し位余分に出せよ，だが地元で何やかやとタカられて居るらしいから御苦労様じやなア。

伊藤，幹事御苦労。案内状の，人生50年幾多多難の人生行路を踏み越えては名文だが，少しセンチだぞ。男に多難は当り前よ。有意義な余生を迎えるためにとは少々退嬰的だね。人生はこれからと云うところだ。頑張ろうぜ。

自動繰糸機を売りに行つて五島に会つたと云うが，あれも煮繭の神様になつたと云う話だから，世の中は変るものだなア。

島原，いよいよ中央御出馬だね。確りやれよ。石井が来れば学生時代の短距離三人男が揃うのだが，やつも日綿で大部長にのし上つたから暇が無いのだなア。

若林，洋行帰りは君1人だ。第一物産も元の三井に還えると云うじやないか。古巣に帰えるのだから一旗上げる時が来たと云うものだよ。

井上，工場長は今が一番忙しいのによく来てくれたなア。それにしても武藤と土屋が顔を見せんので淋しいよ。

顔を見た丈けで，30年の歳月は勿然として消え失せ，学生時代のむかしに帰つて，挨拶抜きの遠慮のない語らいが始る。

酒盃を重ねるに従つて感情がたかぶり膝を叩いて話声は高調し，時の流れを知らぬげに，否，今宵の時の流れの一刻を惜しむかのようである。

かつて在学中のクラス会で十八番を十六番と間違えた小生の失敗を誰かが覚えて居てくれて，どうじや十六番でもやらんかとの動議が出で，笠原君のシブい謡の一曲が流れ，この君の人生の豊さと深さを偲ばせたが，それに続くもの十六番はおろか十五番にも及ばず，やつと「ポプラの木陰で鍛えたる……」の応援歌をたどたどしく歌い合せ，遠いむかしの青春時代が胸によみがえつて，声をのむ者さえあつた。

酒は呑むべし，酔うならば，菊の香漂よう今夜，人生のうさを忘れて，心にくき友と，尽きない名残りを惜しもうよ。お酌の美形が，この場の情景にピッタリする俗謡で「ユツクリ，ユツクリ，ユツクリ，ユツクリ，歩こじやないか，まもなくお別れしにやならぬ。」とかつて彼女にもこうしたシーンがあつたであろう。実感をこめて唄い出した。期せずして立ち上つた一同，肩を組み，この唄声に調子を合わせて，足を上げたり振つたりして，右にヨロヨロ，左にヨロヨロ，そして何度もアンコール，何時果てるとも知れない。

又何時か会おうぜ，身体に気をつけてなア，友達は何時会つても良いものだ。幸せに暮せよ。

(三谷勝記)

東京支会総会

東京支会の本年度定期総会は，去る11月20日に蚕糸会館で開催された。出席会員約50名，本部からは野口理事長が出席した。

まず開会の挨拶に始まり，事業報告，野口理事長の本部及び母校の近況報告等の後議事に入り，前年度決算の承認，本年度定期総会に対する支会提出議題，50周年記念事業寄附募集，会費納入，次年度役員選挙等の諸議題が審議された。

この総会は新顔の出席も多く，年配会員も若い会員も活溌な意見を続々と取交わしたので議場は活気横溢し，真に立派な支会総会であつた。

次期支会長には三谷勝氏が選ばれ，尚その席上鈴木前支会長に対し，御病後の回復未だ充分でなかつた当時から今日に至る2ケ年に亘つて，支会の運営統卒のために御尽し下さつたなみなみならぬ御労苦に対し出席会員から深甚なる謝辞が述べられた。

議事が終つて懇親会に移り一同歓をつくして後母校及び千曲会の万歳を三唱し和気藹々裡に散会した。

(野口記)

Chikuma Salon

吐月峰・美徳 東海道よろめ記

美徳山猿稿

菊と紅葉の晩秋11月初め信州の美徳山猿気候のせいか東海道へ迷い出て9月の22号台風と同じコースを一路よろめき乍ら東上した。

美徳山猿は11月5日950ミリバールの速度で伊勢路を突破して伊勢神宮に上陸参拝して二見ケ浦の海水で喉を湿し，水風を巻き起し亀山に着陸ワキ役の白沢才人を伴い7日岡崎を訪れた。一方遠江の吐月峰山人亦岡崎に出迎えて3人轡を並べて8日終に遠州浜松に現われ，ここに待受けた悪老「森の石松会」の面々，佐藤悪太郎，大箸神経痛，湯川偽博士，近藤司法博士等一把カラゲ7名はバスを買切つて，浜名湖畔罐山寺(カンザンジ)温泉なる東海一の観光地に下界して小波楼なる高級ホテルに入り最低安料理で数名の美形を待べらして小宴を開いた。

多弁舌に税金は掛からぬとばかり自分勝手の気炎を挙げ隣室の迷惑も頓着なくよくも長講舌を吐いたものだ。

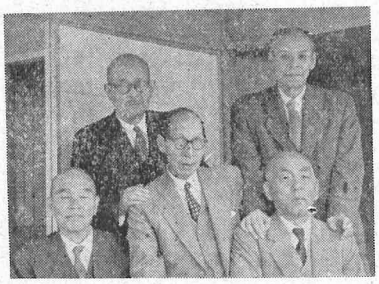
殊に佐藤悪太郎の如きは豪傑笑ひをやりながら，お自慢の仏教の迷口説を初めて一同を悩した。美徳山猿は末だ大海を知らずと見えて，浜名湖を大平洋と感違いして，向側の三河境の山を指して

アレは米国かハワイか

と赤児の様な無智を発表して困つたので博学の湯川ノンベイ博士は曰く

アレでよく信州大学の教授が勤つたものだ

と嘆声を洩した仕末であつた。が大箸神経痛が口を出して



美徳よろめく一場面

ソレだから昨春先生を罷めさせられたのだろ——

と知つたか振りの口をたたいて男を下げたが一同を笑わせた。

そこで黙つていればよい男だのに近藤司法博士が

それでは気の毒だから「森の石松会」が留任復職運動を認めてはどうだ

とまるで箸にも棒にも掛からぬ緊急動議を発言したものだ。そこで吐月峰山人はさすがに一頭地を抜いてソツのない旦那様なので一同を押えて

万場の諸君よ，黙れ。無智の皆々の多愛ない御意見は凡て抱腹絶倒オヘソの宿替のみ，それよりも白沢才人の無音の才智に習うべきだ

と一喝したら一同皆同感同感と唱和して服従したのは面白かつた。

さてあまり一室内で馬鹿馬鹿しい話を交わされては地元の吾々の恥の上塗りをされてはと山猿初め悪老連の怪炎を湖上に放出させるため巡航船ポンポン艇に移乗して佐久目大崎や三ケ日に寄港しつつ一路鷲津に着港した。

三ケ日町は浜名湖北のミカンの本場で見事な黄色の実が鈴ナリの美観で之を見た倉沢山猿はアレは何の実か，信州へ苗を植えたいと駄々をコネて一同を亜然たらしめたので長居は無用と汽車へ乗せて袋井市（33年11月3日より市制）の吐月峰山人宅へ連れ戻つた。だが夜になつて道楽のPatincoをやつて来るとて一人で飛び出して袋井市中をよろめいたで大ケガをしては悪いと思い探しに出掛けたが病膏もうに入つたパチンコ山猿は帰らず深更10時迄も続けて数千円の穴をあけて泣く泣く寝室に入つた翌朝山猿曰く

是非昨夜の損は老妻に内々にしてくれと百拝されたので吐月峰山人厳秘にすると云うと手をついて喜んだ。すまじきものはバクチ哉，山猿よ戒心せよ。

さて倉沢山猿は翌9日引き留めも聞かず，急に帰心矢の如きか急に東を向いてまたまた東海道をよろめき出して平塚の住人松野鶴平参院議長を訪れ，ここでも意気相通じて二人でパチンコに夢中になつたらしい。何処までも人に気をもます山猿ではある。

以上美徳山猿東海道よろめ記とする。失言多謝。

（33.11.19日記代筆吐月峰）

母校だより

1　1月10，18日の2日，母校職員のスキー講習会が菅平で開催された。

2　34年度入学試験は下記の通りに行われる予定。

(1)　願書受付
　2月11日から2月20日まで。

(2)　入学試験
　本科は3月23．24日の2日間，別科は3月25日の1日で行われる。

(3)　試験場は従来通り，母校の外，東京（お茶の水大学）と名古屋（名大工学部）があてられている。

(4)　34年度からは身体検査は行わないで，健康診断書の提出で足りることになつた。

なお詳細をしりたい方は，母校厚生補導係へ問合されたい。

3　1月24日（土）インドから帰られた唐沢正平氏の帰朝講演会が母校講堂で開催れさ，母校職員，学生に多大の感銘を与えた。なお，演題は「インド及び東南アジア各国を巡りて」で約3時間にわたつて行われ，他にサンプル，スライドがあつた。

4　就職状況

本学部の就職状況は1月中旬現在，製糸学科，紡織学科，繊維化学科は殆んど全員決定し，養蚕学科はややおくれているが，年度末までには100％に達する見込みである。

母校振興委員会発足す

千曲会第19回総会の決定に従つて母校振興委員が委嘱された。この委員会は母校の将来の発展に関し，母校に意見を具申し，又は母校よりの諮問に答える目的のものである。第1回委員会は1月17日（土）午後1時から母校会議室で開催される。

編集部移動

長らく部員として御苦労をねがつていた，西山久雄，美斉津利正，柳沢幸雄の3氏が退部し，後任に，矢彦沢清允，篠原昭，降旗剛寛氏が，編集にあたることになつた。

50周年記念事業費申込

1. 茨城支会扱い（追加）
3,000円 竹内 正司（糸20）
2. 北陸支会
1,500円 越坂ミツエ（教5）
3,000円 古平 太三（紡18）
2,000円 浅野スミ子（教5）
1,800円 山田 信（糸17）
2,100円 鶴岡 要三（紡18）
3. 越佐支会
2,000円 村田 謙治（蚕37）
1,500円 松井 忠計（糸別1）
4. 神奈川支会
1,000円 斉藤 典之（紡27）
2,000円 宮沢 健（農2）
5. 宮城支会
1,500円 小沢 安雄（学蚕1）
6. 更埴支会
5,000円 大谷 勇（糸9）
2,500円 堀内 由雄（糸33）
1,000円 竹内 一誠（学蚕5）
3,000円 荒木 栄（糸29）
個人申込
4,500円 市原 文雄（糸21）
3,500円 伊藤要次郎（紡21）
3,500円 久保田哲二郎（紡20）
2,000円 母袋 健一（紡28）
2,000円 土屋 松寿（農2）
小計 48,400円
累計 875,250円

本会評議員選出さる

千曲会第19会総会の議決に基き下記のように選任された。

池田正五郎（北海道），和田敦（北奥），向井攻弥・山本友之亟（宮城），栗原章（山形），藤井富美男（福島），船後勇平（茨城），高橋氾一（栃木），小山清・黒沢袈裟彦・土屋孝（群馬），奥村忠次・岩本賢治・宮前邦雄・山本岩三郎・清水良一・三谷勝（東京），石原六郎（神奈川），秋山利夫・倉沢文夫（越佐），新野武雄（北陸），高品喜一郎（福井），山崎保太（北佐久），野沢司馬作・阿部丈夫・松永省治（南佐久），和田晋・石川博・池田忠夫・一之瀬匡興・笠原正巳・川上保人・小宮山太助・小山長雄・佐藤一・桜井弘吉・関博夫・竹内善吾・竹田寛・田中茂光・茅野功・土屋幾雄・中村馨・松尾卓見・三石賢・山崎啓録・柳沢連子（上小），茂原重雄（更埴），荒井猛・今井甲子男・土屋茂一郎・戸田正行・永井真吉・水口米雄（北信），井沢喜三・北条五郎右衛門（安筑），小松忠幸・手塚政吉・林清市（諏訪），石塚浪之助・市瀬武寿・松下紀男（竜川），鍵谷伝（岐阜）戸倉惣兵衛（静岡），香掛久雄・熊田喜代志（東海），臼井武・佐藤国一（三重），石坂虎治郎・中尾七郎（近畿），大塚重蔵・鈴木玄九（兵庫），馬場長市（三丹），上山巌（鳥取），黒岩覚（島根），江野村一雄（山陽），宇根山哲夫（四国），内川勇・工藤見吉（愛媛），緒方善之助（香川），小山祖光（北九州），深迫明（熊本）中島茂（宮崎），中山吉二（鹿児島），大沢宝市（千葉）

蒲生俊興先生退官 記念品代

（12月25日現在）

金1,000円 倉元 隆太（巻20）
大泉 英明（農2）
横沢正 雄（蚕22）
尾崎 守雄（紡27）
森戸 晋（蚕15）
池田正五郎（〃11）
山本友之丞（〃15）
山崎 伝（〃17）
野里 秀直（〃17）
六川忠一郎（〃18）
市川 信一（〃20）
山本岩三郎（〃7）
金600円 前沢 康雄（〃14）
石井 光一（〃30）
伊藤 力三（〃17）
金500円 上平 恒一（〃21）
尾崎 宗欽（〃18）
土屋茂一郎（糸9）
渡辺 嘉博（蚕22）
久保田正樹（〃2）
倉沢 秀一（〃30）
勝野 貞哉（〃35）
横山 忠夫（〃22）
伊藤 幸男（〃）
市川 文夫（学〃2）
遠山 正人（〃20）
久保田重良（学〃5）
酒井 明良（〃）
湯川 秀夫（蚕1）
河田 栄一（〃18）
宮下 豊次（〃30）
宮堀 後雄（〃17）
中村 馨（〃16）
藤田 四郎（〃22）
平尾 孝平（〃19）
宮城 時久（〃23）
原田 種亀（〃9）
倉沢一二三（〃17）
河野 太郎（〃20）
田中 亮（〃17）
片山 文量（〃29）
橋本 武光（〃7）
丸山 肇（〃33）
坂口 孝保（〃17）
佐藤 克治（〃19）
鈴木 正悟（〃31）
金400円 村田 謙治（〃37）
金300円 三輪 久利（〃34）
神津 昭（〃36）
中沢利三郎（〃17）
木内 茂雄（〃16）
浅田 勝夫（〃31）
柿崎 泰彦（〃29）
小林 敏（〃22）
内藤 康三（〃25）
高田 正気（糸25）
関谷 孝学（蚕1）
宮下 民雄（〃1）
篠田 厚（学蚕2）
大槻 英雄（〃4）

倉沢美徳先生退官 記念品代

（12月25日現在）

金2,000円 六川忠一郎（蚕18）
金1,000円 倉元 隆太（〃20）
横沢 正雄（〃23）
石井 光一（〃30）
森戸 晋（〃15）
山本友之丞（〃15）
山崎 伝（〃17）
野里 秀直（〃17）
山本岩三郎（〃7）
金600円 前沢 康雄（〃14）
伊藤 力三（〃17）
金500円 上平 恒一（〃21）
尾崎 宗観（〃18）
土屋茂一郎（糸9）
金300円 渡辺 嘉博（蚕22）
大泉 英明（農2）
久保田正樹（蚕2）
倉沢 秀一（〃30）
勝野 貞哉（〃35）
横山 忠夫（〃22）
伊藤 幸男（〃）
市川 文夫（学蚕2）
金250円 遠山 正人（蚕20）
金200円 湯川 秀夫（〃1）
河田 栄一（〃18）
宮下 豊次（〃30）
宮堀 後雄（〃17）
水口 米雄（〃）
中村 馨（蚕16）
外村 吉高（〃28）
藤田 四郎（〃22）
平尾 孝平（〃19）
宮城 時久（〃23）
原田 種亀（〃9）
倉沢一二三（〃17）
河野 太郎（〃20）
内藤 康三（〃25）
田中 亮（〃17）
片山 文量（〃29）
橋本 武光（〃7）
坂口 孝保（〃17）
市川 信一（〃20）
曾山 高祥（〃4）
佐藤 克治（〃19）
鈴木 正悟（〃31）
三輪 久利（〃34）
神津 昭（〃36）
中沢利三郎（〃17）
木内 茂雄（〃16）
浅田 勝夫（〃31）
池田正五郎（〃11）
柿崎 泰彦（〃29）
小林 敏（〃22）
高田 正気（糸25）
関谷 孝（学蚕1）
大槻 英雄（〃4）

本会日誌

12月13日 北信支会総会が開かれ山口理事出席された。
12月23日 地元理事会を開催して総会及び理事会の委任事項について審議した。

編集後記

寒さも和らぎ，春遠からじの時候となりましたが，油断されることなく，御自愛下さい。

編集理事 田口亮平 白井美明
編集顧問 小山長雄
編集部員 一之瀬匡興 矢彦沢清允 篠原 昭 降旗剛寛 三石 賢